説教20210704　エゼキエル2：1-7マルコ6：1-6

「反逆の家とは」

キリストよお越しください。弟子たちの中に立ち、復活の御姿を現されたように、私たちの内にもお臨み下さい。

今日の説教題、反逆の家、というのはただならない感じがします。聖書で反逆の家と言えば、身内で殺し合いをしたヘロデ大王の家ですとか、ダビデに挑戦したゴリアテの家のように、武力でもってことをなそうとする荒ぶる家、のことが思われますが、反逆の家というのはそれだけではなさそうです。

主なる神から見た反逆の家とというのは、主なる神のことを思わない家、主なる神のことを忘れた家のことです。たとえ、平穏に、穏便に、無難に、そして楽しそうに暮らしている家族の家であっても、そこに主イエスが共に住んでいないならば、その家は主なる神の目から見れば、全く反逆の家の一つに他ならないのです。

実に厳しい、主なる神の評価だと思われるでしょう。しかしその厳しさは、私たちを愛する主なる神の愛の激しさの裏返しだと思います。主なる神は私たち人間が一人残らず、永遠の祝福の神の国に入れられることを願っておられます。そしてそのために愛する独り子イエス様を、この世に遣わされました。そこにある神の愛が大きく激しいものでないはずかありません。全ての人間を最後まで守り続ける愛というのは、私たち人間には計り知れない熱情を秘めていることではないでしょうか。

そのような愛の神である主なる神は、熱情の神とも呼ばれます。私たちの父なる神は、子である私たちを、熱情を持って愛し続けて下さるということです。ただし、この熱情という語にこめられた意味合いに、私たちは注意を払う必要があります。熱情、激情、熱烈というような類語が思い起こされます。実は、熱情の神の熱情という語は、ねたむと訳してもおかしくない意味合いの語です。実際、口語訳聖書では熱情の神をねたむ神と訳しています。演歌の世界ではないですが、熱情、激情、熱烈、純烈、怨嗟、嫉妬、というように熱情とねたみというのは背中合わせに隣り合ってあるものです。例えば、熱情によって始まった男女の愛がやがて、嫉妬の情に変わって、激しいストーカー行為に至るといった例は、現代社会においても枚挙にいとまがありません。

ねたむ神、というように私たちの父なる神のことを言いますと、完全無欠の主なる神の欠点をあげつらっている様で、いやな思いをされる方もおられるでしょうか。しかし私は完全無欠の父なる神よりも、ねたむ父なる神のほうがすきです。父なる神は、私たちが安易に語り合うことが出来ない聖人君子ではありません。例えばヤコブは父なる神と取っ組み合いの喧嘩をして、父なる神に、負けたと言わせました。またアブラハムは、ソドムの町人を救うために、主なる神としつこく膝詰め談判をして父なる神を説き伏せました。父なる神は私たちとの、そのような濃い交わりをすることをいとわない方です。決して、唯我独尊で、人を寄せ付けない孤高の方ではありません。私たちは父なる神の愛を信じて、手を大きく開いて父なる神と向き合っていってよいのです。

それで、そういった父なる神にくっついてくるのが、ねたむ神としての側面です。もう皆さんも、父なる神の妬みを許せるようになったのではないでしょうか。父なる神は、あなたをどこまでも愛し抜かれようとされています。ですから、あなたがその愛を裏切った時あなたが父なる神にねたまれるのは仕方がないことでしょう。父なる神にねたまれるのはむしろ誇りかも知れません。父なる神はあなたを決して見捨てることはなく、何度も何度もあなた交わりの場所へと連れ帰られることでしょう。

さて、今日のマルコ福音書に出てくる、ナザレというイエス様の故郷、そしてそこにいるイエス様の親戚、家族も、実は反逆の家の一つであります。ナザレという町で、なんか平穏無事に仲よさそうに暮らしている人々を、そのように悪く言うのは怪しからん、と言われるかも知れませんが、主なる神の目から見れば彼らは、反逆の家と言わざるを得ないのです。主なる神は、彼らが主なる神を忘れた暮らしぶりしているのをみて、ねたんでおられると言い換えたほうが分かりやすいかも知れません。

　父なる熱情の神は、ナザレの町にも一人子イエス様を送り込まれました。熱情の神は、どこへでもイエス様を送り込まれます。たとえ、イエス様を拒こばむむような葬儀の場にもイエス様は臨席し、そこでイエス様は奇跡を行われました。それは、この世の人が、「恐れるな、ただ私を信じなさい」というイエス様の御言葉を信じるようになるためでした。

しかし、そんなイエス様もナザレの町ではごくわずかな病人の癒しの他は、「何も奇跡を行うことがおできにならなかった」のであります。果たして、イエス様に、おできにならないことなどあるのでしょうか。私たちは不思議に思うかも知れませんが、イエス様は次のように考えられたのかも知れません。このナザレの町では、いくら素晴らしく目を見張るような奇跡を行ったとしても、その後、「恐れるな、ただ私を信じなさい」と言ったって、誰も信じそうにない、だからここでいくら奇跡を行っても無駄だ、とイエス様は思われたのでしょう。

こんな風にイエス様に思わせたのは、ナザレの人々にとっては実に不幸だったと言わざるを得ません。彼らは多くの奇跡を受けることが出来なかったのですから。では、何がイエス様の奇跡を拒んだのでしょう。それを考えてみたいと思います。

ナザレの町はイエス様が３０歳まで生まれ育った故郷で在ります。イエス様の地上生涯は３３歳だったと言われますが、イエス様はその生涯の大半をこのナザレの町で過ごし、成長をされ、人々と神様から愛されたと聖書には記されています。さてそこで、イエス様が神の子であると分かっていたのは母マリアだけでした。父ヨセフは微妙ですが、彼は早くになくなっていたのです。ですから、マリア以外の人々は、イエスのことを全く普通の、自分たちと変わらない故郷の一員であるとみて、イエス様は、ナザレにおいてそれ以上でもそれ以下でもなかったのです。

そこら辺のナザレの町の人々の心情が６章２－３節で読み取れます。ナザレの会堂で教え始められたイエス様は、人々に驚くべき知恵と、奇跡とをお示しになったのでしょう、人々は驚いて言いました。「この人は、このようなことをどこから得たのだろう。この人が授かった知恵と、その手で行われるこのような奇跡はいったい何か。この人は、大工ではないか。マリアの息子で、ヤコブ、ヨセ、ユダ、シモンの兄弟ではないか。姉妹たちは、ここで我々と一緒に住んでいるではないか。」

このセリフを町の人々がどのような口調で言ったのかは想像するしかありませんが、黙想をしてみますに、何か、淡々としていて、驚くべき奇跡にも驚いていないといった感じを受けます。動じないといいますか、あるいはかたくなであると言い換えてもよいかもしれません。さすがのイエス様もせっかく人々に奇跡を示しても、こんな風に人々の心が動かないならば、その雰囲気に飲まれて奇跡を行うことも出来なくなって当然かも知れません。

では、ナザレの人々がこんなに安定していて動じていないところの、そのよって立つところとは何なのでしょうか。その拠り所が「この人は、大工ではないか。マリアの息子で、ヤコブ、ヨセ、ユダ、シモンの兄弟ではないか。姉妹たちは、ここで我々と一緒に住んでいるではないか。」というセリフに現れてはいないでしょうか。つまり、イエスはこのナザレの町の一員として生まれ育ち、実の母親もいれば、実の兄弟そして嫁いだ姉妹たちも、今現に、目の前にいるではないか。そうして、この３０年という年月をお互いに愛し合いながら過ごしてきたではないか、という確たるよりどころであります。

この目に見えて、肌身に感じることが出来るこの拠り所は、とても手堅く、安心をもたらすものでありましょう。私たち人間は、よそからやってきて、このナザレの人々の暮らしぶりに決して注文を付けることは出来ないと思われて来るでしょう。こんなに平和に暮らしているこの平和をかき乱す理由はないという訳です。

ところが父なる神の目から見れば、冒頭に申し上げました通り、このナザレの故郷の人々もまた、反逆の家の一つなのであります。つまり、このように仲良く暮らしている人々が、全く自分のことを忘れている、ということが熱情の神の妬みを抱かせるのです。父なる神はナザレの故郷の人々を救うために、ここにもイエス様を遣わされましたが、人々は、そんなことは一向に思いもしないで、ただ、イエス様のことをマリアの子供で、自分たちの血を分けた仲間だと思い続けている。これでは、父なる神がナザレの故郷の人々をねたむもの無理がないことでしょう。

私たちは、ナザレの町の人々のこのような平穏な日常の生活の中にも、父なる神をねたませるような罪が潜んでいることに思いをいたしたいと願います。今日、ナザレの町の人々が語ったセリフには、何か私たちが語ったとしてもおかしくないような信憑性があります。

　実は私たちも日々、主なる神から多くの奇跡を見せられてはいないでしょうか。日が暮れてまた新しい朝が与えられるということも、よく味わえば主からいただく奇跡なのではないでしょうか。ところが、私たちは、その奇跡に対して非常に鈍感になっていて、ただ惰性で、「はい日が変わって今日は５日になりました」、という風に何の感動もなく受け取ってはいないでしょうか。このような私たちそっけない態度は、あるいは熱情の父なる神の妬みをずいぶんと買っているかもしれません。

私たちが父なる神からねたまれないようにするにはどうすればよいのか、それは以外に簡単です。私たちはいつも父なる神のことを忘れず、その愛を忘れず、御子イエス様からの恵みを大きく手を開いて感謝して受け取っていれば、私たちが父なる神からねたまれることはないでしょう。それどころか、父なる神は、そんな私たちを喜んで、ますます、私たちに対して奇跡の業を行うことがおできになられることでしょう。

私たちは、日々の平穏な家族の暮らしの中に、常に見えない御子イエスキリストを招き入れる必要があります。見えない御子イエスキリストはあなたの家族の一員であります。そのことを覚えて、また新たな一週間の家族の歩みを進めて参りたいと願います。

おいのりいたします

哀れみ深い父

あなたは計り知れない熱情を持って私たちを愛されています。またあなたは妬む心によって、鈍い私たちにその愛を知らせていてくださいます。どうか私たちが自分の罪ゆえに招く災いと暗闇からあなたによって救われ、またあなたの愛のうちに生きることが出来るようにしてください。

私たちの日々の生活のうちにも御子イエスが共におられ、私たちを祝福し喜びへと招いていて下さることに感謝し、あなたを賛美することが出来ます様に。

この度の大雨によって罹災した方々を覚えます。なくなられた方々、また行方が分からない方々が、あなたの深い慈しみのうちに守られます様に。

家を流され、傷を追われた方々の苦しみをのぞき、平安を与えてください。

全てをご存じであるあなたが、ご家族を探しておられる方々に、希望のみ光を照らしてくださいます様に。

父と聖霊と共に